

## 「不条理」の自由 : 生への試論 (Albert Camusの場合)

著者	平田 重和
雑誌名	仏語仏文学
巻	8
ページ	135-152
発行年	1975-12-10
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10112/00017558">http://hdl.handle.net/10112/00017558</a>

# 「不条理」の自由

— 生への試論 —

(Albert Camus の場合)

平 田 重 和

人間の自由の問題を考へてみる時、現実とのかかわりにおいて討議されねばならないことはいうまでもなからう。しかし、Albert Camus の文学、とりわけ、太陽は「歴史が一切でないことを私に教えた」<sup>1)</sup> と自ら述懐した頃の不条理の系列に属する初期の作品において、この問題をみようとす時、外的なもの（歴史的現実的なもの）とのかかわりの意識は稀薄で、人間の宿命論的なものとの結びつきが極めて強く感じられる。

P. H. Simon は *Noces* における Camus の「官能的神秘主義」について語りながら、次ぎのように述べている。

Ce qui résume aussi une tentative de retour à la santé et à l'innocence de la brute, donc le renoncement méthodique à l'attitude humanisme—s'il est vrai que celle-ci tend, au contraire, au raffinement de la sensibilité par la culture et au gouvernement de la conduite par l'esprit. Camus est donc parti de très loin.<sup>2)</sup>

しかし、ヒューマニズムというものを別様に定義すれば Camus はそれ程「遠くから出発した」のではないともいえはしないか。

仮りにヒューマニストというものを人間を抑圧するもの一切に対して人間を全的に生かすために戦う人と定義し、この人間を抑圧するもの一切のなかに、歴史的現実的なもののみならず、形而上的なもの、すなわち人間

---

1) *L'Envers et l'Endroit* (Gallimard) p. 14

2) *L'Homme en procès*. par P.-H. Simon (Petite Bibliothèque Payot) p. 96

の運命とか宿命といったものを含めると、その思想の表現の形式は「無器用」であったかも知れないが、Camus はヒューマニズムからそれ程遠くには位置していなかった。

☆

人間に生きる希望を与える思想、すなわちヒューマニズムと深いかわりのある自由の問題が Camus 自身によって、幾分まとまりをもって討議されるのは42年（1942年）に刊行された *Le Mythe de Sisyphe* においてであるが、38年（1938年）8月と推測される *Carnets I* に Camus は次ぎのように書いている。

La seule liberté possible est une liberté à l'égard de la mort. L'homme vraiment libre est celui qui, acceptant la mort comme telle, en accepte du même couples conséquences—c'est-à-dire le renversement de toutes les valeurs traditionnelles de la vie. Le “Tout est permis” d'Ivan Karamazov est la seule expression d'une liberté cohérente. Mais il faut aller au fond de la formule.<sup>3)</sup>

この断章は後に *Le Mythe de Sisyphe* で使われるものであるが、ここで、すでに Camus 的自由の概念、すなわち、「不条理」の自由の骨子は明らかにされているものと思う。

「不条理に関するエッセイ」*Essai sur l'absurde*（正確には不条理なものに関するエッセイと訳さねばならないだろうが……）という副題をもつ *Le Mythe de Sisyphe* における不条理の推論は論理性に乏しいということは早くから指摘され、そして多くの人の一致して認めていることであることは周知のところである。

「absurde」という語の一般的な使用法から、いわゆる世界と人間の対立状態を示す Camus 独自の意味をもたせるにいたった経過については Camus 自身、*Le suicide philosophique* と題された章で説明をしているが、

3) *Carnets I* (Gallimard) p. 118~119.

l'absurde (不条理なもの), l'absurdité (不条理性) といった語の特異な使い方, 及び世界と人間と「不条理」といったものを「劇の三人の登場人場」<sup>4)</sup> とみなすという発想など多分に思いつきの要素の強いものと思われ, 「神話」を起草する前に Camus がどれ程論理性ということにウエイトを置いていたかは疑問のところである。

「不条理」という概念が曖昧であるということもしばしばいわれているところであるが, 「不条理」思想の曖昧さは避けられぬものであった。

「不条理の推論」 Un raisonnement absurde の出発点は「人生は生きるに値しない」<sup>5)</sup> ということであり, 人生に関してこのような認識を得たものが, 必然的に自殺しなければならないかどうかということであったことは周知のところである。そして「不条理の推論」の結論をわれわれは知っている。それはいうまでもなく「生きる」ことである。

Ce qui précède définit seulement une façon de penser. Maintenant, il s'agit de vivre.<sup>6)</sup>

しかし, Camus の結論に反して論理性をいうならば「人生は生きるに値しない」という命題を出発点とするならば, 自殺が論理的に首尾一貫した結論になりはしないか。A. King のいうように, 反抗し, 世界と人間との対立状態を維持し, 自殺を拒否するということは, 論理的であるというよりは, むしろ「道徳的な決意」<sup>7)</sup> である。

論理性は最初から放棄されていた。従って, Le Mythe de Sisyphe は「哲学序説」といったスタイルでなく Essai であったわけだ, 大切なのは「生きる」ことへの意志をうながすその叙述であろう。

Le Mythe de Sisyphe において, われわれのテーマ“「不条理」の自由”との関係で重要なのは「時間」である。われわれ人間は時間の描く

4) Le Mythe de Sisyphe (Gallimard) p. 45

5) ibid. p. 16

6) ibid. p. 90

7) Camus. by Adele King (Oliver and Boyd) p. 23

「曲線」上にあり、「自分がその曲線のある一瞬の点に立っていること」<sup>8)</sup>を認めなければならない。こういった認識は、ヨーロッパの哲学史においてはじめてではないが、Camus の論述に従ってゆくと、われわれは「明日になれば……」というように「明日」に期待をかけて生きてゆく。しかし、その時間の運ぶ「曲線」をたどってゆけば、その先にわれわれの存在を否定する死が「数学的确实性」をもって立ち現れ、われわれの人間的冒険の営みがすべて無益であることを思い知らされる。

最近刊行された Cahiers Albert Camus II をみれば、Camus は早くから生と死の問題をみつめるモラリストであったことがよくわかる。

Cahiers II の中の Les voix du quartier pauvre に登場する「死ぬために生れてきた男」はもう一度 L'Envers et l'Endroit に登場するが、絶望して街をさまよい歩きながら、明日に期待をかけている。しかし「明日も何のかわりもないだろう」ということに思い至り、「このいやしがたい発見」を前にして挫折してしまう。

.....demain tout changera, demain. Soudain il découvre ceci que demain sera semblable, et après-demain, tous les autres jours. Et cette irrémédiable découverte l'écrase.<sup>9)</sup>

こういった明日の不毛性を前にして、われわれは生か死かの問題をせまられる。「不条理の推論」の結論はすでにわれわれは知っている。それは「生きる」ことであるが、「不条理」の自由とはこの生にかけたもののみえてくる自由であることはいうまでもなからう。

「不条理は、明日というものは無いということ、この点を私に明らかにする、今後はここにこそ深い自由があるのだ」<sup>10)</sup> と Camus 独自の自由が告げられるのである。

A. King の言葉を借りて言えば、この自由は「死刑囚の自由」<sup>11)</sup> であ

8) Le Mythe de Sisyphe p. 28

9) Cahiers Albert Camus II (Gallimard) p. 278

10) Le Mythe de Sisyphe p. 82

11) Camus. by A. King. p. 25

るが、戯曲 *Caligula* の主人公 Caligula はこの自由を、徹底的に行使する「不条理」の英雄である。

戯曲 *Caligula* は44年に発表され、戦後になって初めて舞台にかけられた戯曲であるが、*Carnets I* のメモ<sup>12)</sup> から推測すると1937年に着想され、翌年の38年にはほぼ完成していた作品であるようだ。従って、*L'Etranger* や *Le Mythe de Sisyphe* などとほとんど同時代の「不条理」の作品群を形成するものの一つと考えるとさしつかえなからう。もう少し、年代的に正確に言えば、*L'Etranger* の脱稿が1940年の5月であり、*Le Mythe de Sisyphe* の第一部の完成が、同じ年の9月であるとすれば、*Caligula* の方が、むしろこれら2作品よりも先である。

この場合、先であるということには多少の意味がある。というのは問題点が稚拙な感じはまぬがれないとしても、素朴な形で、鮮明に浮き彫りにされているからである。

幸福であった皇帝 Caligula は、妹でもあり情婦でもあった愛する Drusilla の死を契機として、世界の不条理を識る。「人間は死ぬそして人間は幸せでない」<sup>13)</sup> と Caligula はいう。

これが Caligula が発見した真理であり、この人間の条件(宿命)に対する Caligula の反抗(挑戦)が、戯曲 *Caligula* のテーマであるが、この世界が理性で割り切れないならば理性的であることに何んの意味もない。

「この世界はくだらぬものだ、そしてこのことを知ったものこそ自由を獲得」<sup>14)</sup> するのだ。ここから「不可能なものを可能にする」(「月を手に入れる」) Caligula の冒険が始まるのだが、Caligula は「悪の中で純粋」<sup>15)</sup> になることを選ぶ。なぜなら「神々と肩を並べる方法は一つ、神々と同じく

12) *Carnets I* p. 43 の1月のメモは *Caligula ou le sens de la mort. 4 Actes*<sup>1</sup> とあり終幕の様子がメモされている。

13) *Le Malentendu suivi de Caligula* (Gallimard) p. 122

14) *ibid.* p. 135

15) *ibid.* p. 181

残酷<sup>16)</sup> になることだからである。Caligula は狂気を装い、破壊におもむく。彼は皇帝という地上的絶対権力者であるので彼の行使する「自由」には限界がない。全く無意味に貴族たちを殺したりする。しかし、最後に Caligula は、貴族たちの反乱によって殺される前に、道を誤ったことに気づき次ぎのように叫ぶ。

Je sais pourtant, et tu le sais aussi (...), qu'il suffirait que l'impossible soit. L'impossible! Je l'ai cherché aux limites du monde, ..... 中略..... Je n'ai pas pris la voie qu'il fallait, je n'aboutis à rien. Ma liberté n'est pas la bonne.<sup>17)</sup>

「悲劇の主人公は運命に従うよりは運命に挑む者」<sup>18)</sup> であるとするならば、Caligula は Camus の不条理の英雄たちの中でも最も戦ましい英雄と行ってさしつかえないだろう。(Sisyphé がもつと慎ましく己れの悲劇性をみつめており、刑務所付司祭に対して最後に怒りを爆発させる時を除いては、Meursault がもつと控え目で、人間的である時に、運命に対するその挑戦的な態度、華々しく怒りに狂ったようなその徹底した振る舞いなどにおいて——。)

従って、Camus の不条理に親んだものには哲学的に屈つばいが Caligula という戯曲はよく「わかる」のである。しかし、この場合「わかる」ということと芝居としての成功度の問題は別であろう。悲劇性をふりまく主人公の Caligula に収斂される悲劇 Caligula は劇作品としてはあまり成功作でないというのが一般的な評価である。

しかし、こうした評価が、芝居そのものの密度とか劇的緊強度からくるものであれば、問題はないが、仮りにそれが Caligula のニヒリズムとかペシミズムからくるものであれば、にわかには賛成しかねる面がある。

後年、Camus は論理を徹底させるとニヒリズムに通ずるとして「中庸

16) *ibid.* p. 193

17) *ibid.* p. 249

18) *La mer et les prisons.* par Roger Quilliot (Gallimard) p. 64

と均衡」の思想を説いた。Caligulaにはそうしたニヒリズムに通ずる要素がないとはいえない。恐らく作者自身の意図も、死すべきものとして宿命づけられている人間の悲劇をうつたえるところにあったことも事実であるろう。

しかし、あまりにも激しく運命に対して挑戦するCaligulaの姿勢の裏に、「悪の中で純粹」であっても、その純粹さ故に、青年皇帝Caligulaの充足した生へのあくなき欲求、すなわち「生きる意志」<sup>19)</sup>がかくされていることを見落してはなるまい。

Caligulaを、いわゆる「生の歎び」を謳歌しているといわれているNocesと同列に置くことには少し無理があるかも知れない。しかし、Nocesにも死の影がないわけではないのである。

一般的にいて、Camusの作品を理解しようとする時、L'Envers et l'Endroitは死の世界を、Caligulaはニヒリズムを、Nocesは生の世界をといったように単純に図式化するのは作品の誤った解釈につながる危険性がある。もちろん、アクセントの置かれ方は違う。しかし、それはアクセントの置かれ方の違いであって、Camusの世界には、鏡にうつる虚像と実体との関係のように、つねに、「裏」と「表」が共存していることを見抜く必要があるろう。ともあれ、われわれはCaligulaにおいてCamus的自由の一典型をみることができたのである。

☆

さて、最近になってあいついで刊行されはしたものの、今まで処女作と考えられていたL'Envers et l'Endroitよりも古い日付をもつAlbert Camus Cahiers I-La mort heureuseと同Cahiers IIあたりではどうだろうか。<sup>20)</sup>

19) 高島正明著「アルベール・カミュ」講談社現代新書、参照。

20) Cahiers Iは1971年に、Cahiers IIは1973年に刊行されたが、Cahiers I「幸福な死」は1936年頃から着手され、Cahiers Iは1932年から34年までのエッセイを収録したものである。



Cahiers I 「幸福な死」が、著者自身の手によっては、ついに発表されなかった未完の作品であることは周知のところである。そして、事実一個の作品になるためには、色々と欠陥の多くあることも同様、周知のところであろう。

後年、Camus は L'Envers et l'Endroit の表現の未熟さにこだわったが、La Mort Heureuse の場合も、その「無器用さ」maladroit が、作品の公表を断念せざるを得なかった大きな理由であっただろう。しかし、そういう未熟さ、無器用さにもかかわらず、将来を占えるようなテーマの萌芽はすでに、みられはしないだろうか。

「幸福になるためには時間が必要」<sup>21)</sup> で「お金によって、時間を買わねばならない」<sup>22)</sup> と思った Mersault (メルソー) は、金持ちの Zagreus を殺し、普通なら、お金を獲得するために犠牲にしなければならない時間を、反対に「買う」ことに成功する。しかし、Mersault の真の幸福とは、自由に旅行したり、物質的に恵まれることなく、世界と一体となり、自覚した死を、死ぬことに他ならない。

Cahiers II は Cahiers I よりも古い日付をもち、Camus が関係していた同人誌 Sud 「南」などに寄稿したエッセイを集めた短篇集の体裁を取っている。

最も古い日付をもつのは、Un nouveau Verlaine, Jehan Rictus (Le poète de la misère), La philosophie du siècle, Essai sur la musique, など「Sud」に発表したもので1932年であり、テキストの最後に収録されている Les voix du quartier pauvre は1934年である。

初期の作品は「《夢》と《現実》の永遠の争い」<sup>23)</sup> のなかで、まだ多分に夢想的要素の強いものであるが、将来「不条理」の自由を語り、これを己れの思想と芸術の基盤に据える作家の足取りを探る作業において、最も重

21) Cahiers I. (Gallimard) p. 76

22) ibid. p. 76

23) Cahiers II p. 143

要なものは、Les voix du quartier pauvre であろう。この短篇の「死ぬために生れてきた男」の物語は先でも一度触れたが、すでに、そこには人間の唯一の現実、死を見つめる作家の視線<sup>まなざし</sup>がある。

Les hommes bâtissent sur la vieillesse à venir. A cette vieillesse assaillie d'irremédiables, ils veulent donner l'oisiveté, qui la laisse sans défense. Ils veulent être contremaitres pour se retirer dans une petite villa. Mais une fois enfoncés dans l'âge ils savent bien que c'est faux. Ils ont besoin des autres hommes pour se protéger.<sup>24)</sup>

☆

L'Envers et l'Endroit については、これまで度々その名を出したが、G.-P. Gélinas はその著 La liberté dans la pensée d'Albert Camus の一節において次ぎのように述べている。

Quiconque réfléchit à la liberté humaine est d'abord confronté à la condition mortelle et la mort devient ainsi enseignement pour la vie.<sup>25)</sup>

Camus の L'Envers et l'Endroit の「裏」と「表」は人生における「裏」と「表」の多くのものの象徴となりうるが、なかでも生と死の象徴であることは容易にうなづけよう。

最初の短篇 L'Ironie に登場する「皆が映画に行くために置き去りにされる女」と「話を聞いてもらえない老人」は Les voix du quartier pauvre に登場した人物であるが、これにもう一人「仮病を死まで押し通した祖母」<sup>26)</sup> を加えて 3 人の老人と作者自身らしい青年とが登場する。

L'Ironie (皮肉) とは、これら 3 人の老人達と青年 (達) の間に、真の対話がなされていないことに対する作者のいらだちである。しかし、さらに深い Camus のイロニイとは、死という真実を直視しようとしないう人間に対するイロニイである。3 人の老人は 3 様に、「ごまかし」des tricheries

24) ibid. p. 287

25) G.-P. Gélinas, La liberté dans la pensée d'Albert Camus (Ed. Universitaires Fribourg Suisse) p. 22

26) L'Envers et l'Endroit p. 53

によって真実を見ようとしなない。しかし、神も人間（他者）も彼らをいやしてはくれない。G.-P. Gélinas のいうように、もし“幸福な死”という言い方が可能であれば、それは真実に向かって生きられた人生によって、はじめて可能となる。

「無意識の中にもいけないし、ごまかしの中にもいけない。これが L'Ironie から引き出せるメッセージ」<sup>27)</sup> なのである。

Les voix du quartier pauvre に出てくる。老人達にはまだ救いがあった。なぜなら、彼らには「人間が避難するのは人間たちの中である」<sup>28)</sup> という意識があったから。しかし、L'Ironie の老人達は死は他人とわかちあえるものではないといういっそう厳しい現実の前に立たされていることになる。

L'Ironie の次ぎの短篇 Entre Oui et Non は、われわれのテーマとの関係においても、将来、「不条理」の自由を語る作家にとっても、決定的に重要と思われるある特異な体験について語られたものである。

後年、Camus は L'Envers et l'Endroit の序文でその形式の「無器用さ」にこだわったことはすでに触れたが、同時に Camus はその序文で、その作品のなかに表現されたものを何一つ否定 renier しないとはっきり宣言している。<sup>29)</sup> そして、繰り返すように、自分の芸術の源泉はこの作品のなかにあることを言い「人間の作品というものは芸術の紆余曲折を経て、そこに心がはじめて開かれたところの二・三の単純で偉大なイメージに立ち戻るための長い道行以外の何ものでもない」<sup>30)</sup> と述べ、「この再版の機会に、自分が書いた最初のページを見直した時、ただちに、何よりも先ず、私書きとめておきたいと思ったのはこのことである」<sup>31)</sup> とそ

27) G.-P. Gélinas, La liberté dans la pensée d'Albert Camus p. 22

28) Cahiers II p. 287

29) L'Envers et l'Endroit p. 11

30) ibid. p. 33

31) ibid. p. 34

の序文を結んでいることは周知のところである。

Entre Oui et Non で語られている体験はおそらく、作家 Camus がつねに立ち戻った「単純で偉大な images」であったはずだが、生と死の問題、とりわけ最初の発病（結核）以来いっそう深刻さを増していたであろう生と死の問題の解決に一つの方向性をもたせるような重要な体験ではなかっただろうか。

Le monde s'était jamais dissous et avec lui l'illusion que la vie recommence tous les jours. Rien n'existait plus, études ou ambitions, préférences au restaurant ou couleurs favorites.....(中略).....Et cette nuit, je comprends qu'on puisse vouloir mourir, parce que, au regard d'une certaine transparence de la vie, plus rien n'a d'importance.<sup>32)</sup>

このように世界が溶け去り、もはや何ものも存在せず、又何ものも意味をもたないようなところでは、生も死もすべてが「等価」なものとなり、同時にすべては「単純」なものとしてみえてくる。世界はそれ自体では単純であり、人生も又しかりだ。

「そうだ、すべては単純だ。ものごとを複雑にするのは人間」<sup>33)</sup>なのだ。

「悟り」の境地にも似た体験をするこのような時が、いわば、「Oui と Non の合間」の時刻であるが、この「時」の体験の重要性は L'Envers et l'Endroit の構成からも証明されるであろう。短篇 Entre Oui et Non を境として Camus の pensée が、死から生の方へ、「裏」から「表」の方へ動いて行っていることがよくわかる。

Entre Oui et Non に続く短篇は La mort dans l'âme である。これは実際に旅行した時の体験記のようなものであるが、うす暗いホテルの一室において死者のかたわらで「生の光、生の午後光」<sup>34)</sup>が「私」を仰天させ、次ぎの短篇 Amour de vivre では、「誇張がないわけではない」が、Il n'y

32) ibid. p. 69~71

33) ibid. p. 76

34) ibid. p. 92

a pas d'amour de vivre sans désespoir de vivre。<sup>35)</sup> となり、生の中に死が内包されているという真理をおぼろげながら識る。そして、最後にこの短篇集の表題にもなっている *L'envers et l'endroit* では「この世」が肯定されるに至る。

A cette heure, tout mon royaume est de ce monde. Ce soleil et ces ombres, cette chaleur et ce froid qui vient du fond de l'air。<sup>36)</sup>

このアクセントの移動は *Noces* を予告するものであるが、この死から生への力点の移動は Camus の内部において、人間的自由の拡がりを同時にしるしづけるものであろう。

☆

*Noces* とは世界と人間との「結婚」であり、*Noces* が生の讃歌、官能的な生の歓びをうたったものであることは周知のところである。

*Noces* は「人間と大地との婚礼を唄いあげる。それは自然界の美に捧げる讃歌、徹底した感覚の世界と自己の運命の掛値のない値ぶみのなかで幸福を見出す人間の勇気をたたえる讃歌」<sup>37)</sup> である。

しかし、あまりに一方を強調することは、Camus の作品を解釈する場合危険を伴う。なぜなら *Noces* には光の世界 (=「表」) の影に、死の意識 (=「裏」) が潜行しているからである。*Noces* のあの高らかな調子は、むしろ明確に死を意識した時の反動といっても過言ではなからう。

Il ne me plaît pas de croire que la mort ouvre sur une autre vie. Elle est pour moi une porte fermée. Je ne dit pas que c'est un pas qu'il faut franchir : mais que c'est une aventure horrible et sale。<sup>38)</sup>

死が「怖ろしく不潔な事件」という意識が強くなればなるほどそれだけいっそう生が強くと肯定されるという関係、*L'Envers et l'Endroit* の「生への絶望なくしては生への愛もない」という命題がもう一度繰り返され、

35) *ibid.* p. 113

36) *ibid.* p. 123

37) Camus. by A. King p. 18. 訳文は大久保敏彦氏訳による。

38) *Noces* (Gallimard) p. 37

その調子がいっそう強められたものであることがうなづけよう。

Noce は人間の宿命に憤然として立ち向かった Caligula の挑戦を裏がえしにした Camus の若き日の人間的自由の讃歌なのである。

☆

Camus を「不条理」の作家として一躍有名にしたアルジェリア期の最も重要な小説 *L'Etranger* に関して自由の問題をみようとする時、第1部の終りと第2部の終り（小説の終り）のところが非常に重要であり、このところの問題のとらえ方が小説の解釈の仕方をも左右するといって過言ではないであろう。

Bernard Pingaud のいうように *L'Etranger* の解釈の歴史はそれだけで長い研究に値するだろう。<sup>39)</sup> はじめに Sartre によって *L'Etranger* の鍵が *Le Mythe de Sisyphe* に求められて以来、様々な角度から解釈の試みがなされて来た。しかし、*L'Etranger* という小説はある解釈が試みられても、その解釈の綱の目からこぼれて又新しい顔をみせるように思えてならない。

ところで、作品の芸術性とか思想性の高さが、その作品の解釈の多様性をひき起すものであるといういい方が許されるならば、「《唯一の》解釈について語ることは一もはや可能ではない」<sup>40)</sup> *L'Etranger* は稀に成功した作品であるといえよう。そこで、*L'Etranger* についての解釈は今後もますますたくさん出されるだろうし、その研究方法も又多様化するであろうが、*L'Etranger* に対する *Le Mythe de Sisyphe* の重要性が薄れるわけではない。

原点に戻って *L'Etranger* を考えてみるならば、*Le Mythe de Sisyphe* の重要性があらためて思い起こされるだろう。

さて、自由の問題との関係で一つのポイントになる小説の第一部の終り、すなわち Meursault のアラブ人殺害の事件に関していうと、*L'Etranger*

39) B. Pingaud, *l'étranger de Camus* (Classique Hachette) p. 42

40) *ibid.* p. 45

を読んで、また「不条理」に親しんでいない最初の読者にとって、何かスッパリしない印象を残すところではなからうか。

事実ここは Meursault の犯罪動機という問題で、色々意見のわかれるところである。<sup>41)</sup>

Meursault が浜辺で、アラブ人めがけて発砲したのは、「空からふりそそぐ灼熱から逃れたい」<sup>42)</sup> という彼の欲求であり、「肉体的感覚に向かおうとするその受動性が、彼をして犯罪に導かせた」<sup>43)</sup> のであり、「不条理に直面したとき、人間はただ受身のままで生きることにはできないということ」<sup>44)</sup> を示唆しており、「世界の均衡」を破ろうとしたためであり、「不条理に打ち勝つため」であり、Meursault 自身の弁明によれば「太陽のせい」であった。これらの諸理由がすぐれて Meursault の殺人の動機を説明するものであることに私も異存はない。しかし、こうした Meursault の犯罪動機をいくつか並べてみても、あの場面での Meursault の人間像といったようなものがハッキリと浮んでこない。

Meursault はいかにも偶然が積み重ねられたような状況において殺人に及んでいる。

ここで B. T. Fitch の警告<sup>45)</sup> を思い出して、L'Etranger をあまり密接に Le Mythe de Sisyphe に結びつけてテキスト解釈の貧困化をまねくよ

41) 拙論で一度述べたことがある。(LUTÉCE5「A. カミュと L'Acte gratuit」)

ただし、Meursault の犯罪動機＝「不条理の自由」というような論述の仕方をしたのは少し飛躍があったように思っていたところである。

42) Philip Thody, Albert Camus 1913-60 (Hamish Hamilton)

43) *ibid.* p. 34

44) *ibid.* p. 34

45) Albert Camus 1 (la revue des lettres modernes) p. 231~232 で B. T. Fitch は次ぎのように述べている。

Le rapprochement entre L'Etranger et Le Mythe de Sisyphe date de «Explication de L'Etranger» de Sartre et a souvent donné lieu à des interprétations schématiques et abusives du roman qui ne pouvaient que constituer un appauvrissement du texte.

うなことは避けたいと思う。しかし、小説を読んだ時の感動とは別に、小説を解釈しなければならないとすれば、Meursault の行為を “Tout est permis” という「不条理」の自由の表現としてみなしたい誘惑にさらうことができない。

小説の中でいつ Meursault が, Lever, tramway, quatre heures de bureau ou d'usine, repas, tramway, quatre heures de travail, repas, sommeil et lundi mardi mercredi jeudi vendredi et samedi sur le même rythme.<sup>46)</sup> といった単調な日常生活の繰り返しから「目覚め」たかは明らかではない。Sartre のいうように「Le Mythe de Sisyphe のなかで討議されるいかなる問題も、ここには提出されていないかに見える。彼が死刑囚たる以前に反逆者であったかいなかも、これを知ることができない。彼は幸福であったし、成り行き任せ」<sup>47)</sup>でもあった。

Carnets I の1937年8月に Camus は次ぎのように書きとめている。

Un homme qui a cherché la vie là où on la met ordinairement (mariage, situation, etc.) et qui s'aperçoit d'un coup, en lisant un catalogue de mode, combien il a été étranger à sa vie (la vie telle qu'elle est considérée dans les catalogues de mode).<sup>48)</sup>

これは普通 L'Etranger の最初の発想であると考えられているものであるが、これが L'Etranger のテーマの最初の意識的な形成<sup>49)</sup> であるとするれば、肉体的感覚に触れるものを除きすべてに対して無関心である Meursault の心的状態は Le Mythe de Sisyphe で説明されている意識の目覚め以後の不条理の英雄の image と重ねることもそれほど無理なことではなからう。

小説には、Meursault が意識の眠りから目覚めた時についての描写は

46) Le Mythe de Sisyphe p. 27

47) J.-P. Sartre Situations, I (Gallimard) p. 101~102

48) Carnets I p. 61

49) *ibid.* p. 61



ない。小説の第一部では Meursault はまだ真の「不条理」の英雄ではない。しかし、日常的な意識の鎖から解放されている状態であるといつてさしつかえなからう。A. King も同じような見解のようだ。

Because he realises that he cannot impose a meaningful pattern on life, Meursault consciously rejects economic and social ambitions. He sees the lack of coherence in the world, and he refuses the usual abstractions that men place between themselves and reality.<sup>50)</sup>

このような心的状態にある者にとっては、世間的出世（会社の patron が、Paris への転勤の話を Meursault に持ちかけるが、Meursault が《…要するにそれは私にとって同じことだ。……生活が変わられるなんてことはなかった。》<sup>51)</sup> といって patron の申し出を断ること）とか、結婚の問題（Marie との結婚についての問答）など、そして Raymond に手紙の代筆を頼まれて拒絶しないこと（なぜなら《彼を満足させないという理由はなかったから》<sup>52)</sup> である）、さらには肉親に対する愛情（Meursault は彼の弁護士に、《たぶん、私は深くママンを愛していたが、それは何ものも意味していない》。<sup>53)</sup> といって弁護士を驚かせている）などの問題さえも「無意味」で「何の重要性もない」ものに思えてくるのだ。

そして一瞬 Meursault は目がくらんだようになって凶行に及んでしまったのだ。

「すべてが許るされている」という「不条理」の自由の判断は形而上的内的な次元での問題であり、これが現実に適応されるものでないことは断るまでもないが、まさにこの点において、自然児 Meursault の深い「自由」と同時に彼のきわだった異邦性が認められるところなのである。

しかし、完全で無拘束な自由が社会的に通用しないことはいうまでもな

50) Camus. by A. King p. 49

51) L'Etranger (Gallimard) p. 63~64

52) ibid. p. 50~51

53) ibid. p. 94

い。

小説の第二部は獄舎につながれ、死刑の宣告を受け、処刑の日を待つ Meursault の物語であることは周知のところである。そして、小説の最終部は Meursault がキリストのように「悩める人類の運命そのもの」<sup>54)</sup> の象徴となっていることも。

Sartre のいうように Le Mythe de Sisyphe は《ある夜明けに牢獄の扉がその前に開かれる、死刑囚の完全な自由》を讃えている。そして「この夜明けとこの自由をわれわれに味わわせるため」<sup>55)</sup> に Camus はその主人公を極刑に付したのである。L'Etranger は二度、われわれに「不条理」の自由を顕示する。

そして、われわれは、しるしと星々に満ちた夜を前にして、世界のやさしい無関心に心を開き「自分は幸福だったし、今もなお幸福であることを感じた」<sup>56)</sup> 主人公 Meursault を「英雄」などではなくわれわれに身近な親しい人物として感じるができるのである。

☆

Le Malentendu は L'Etranger 中のエピソードから発展して劇になったものである。

L'Etranger の中で Meursault が述懐するように「一方ではありそうにもなかったが、他方、自然でもあった」<sup>57)</sup> 話である Le Malentendu は不条理劇の系列に入るものであろう。

しかし、Jan の台詞<sup>58)</sup> にみられるように、連帯への意識もかすかにみ

54) La mer et les prisons p. 96

55) J.-P. Sartre, Situations, I p. 109

56) L'Etranger p. 172

57) ibid. p. 114

58) Jan は次ぎのようにいっている。

Seulement, on ne peut pas être heureux dans l'exil ou dans l'oubli. On ne peut pas toujours rester un étranger. …筆者。

Le Malentendu s'rive de Caligula. p. 30~31

られ、「不条理」の自由よりも、後の作品につながって行く戯曲と考えたい。

なお、小論で扱った作品を書いていた時期に Camus はジャーナリストとして、社会的政治的不正に対して、現実的具体的な人間の自由を求める戦いを戦っていたが、この点については小論では、はじめから触れるつもりはなかった。いずれ機会をあらためて考えたいと思っている。

(本学助教授)